

● 昔はラヂオ少年だった

最近の秋葉原の変貌ぶりには驚かされる。筆者は、じつはラヂオ少年と言われたオタクのなれの果てで、半世紀にわたって秋葉原に出没してきた。

自宅のラヂオはすべて明治生まれの父親の自作であった。父親はもともと化学会社の経理で、戦時中の統制経済のために役人になった人物である。そのため、電気方面の学問からはほど遠いまったくの素人であった。いわゆる電蓄に凝っていて、戦後の食糧難の時代に、型番は忘れたがRCA製の電力増幅管を売って畳替えをしたことを覚えている。

そのような父親が病気になるってしまい、なおかつ自宅のラヂオが故障したことが、筆者のラヂオ少年歴の始まりである。それまでは本が大好きで、どちらかと言えば旧制女学校の国語教師だった母親似の人生を送る路線を歩いていた。

● コンピュータ少年のほうがおもしろい

実際に中学校、高校ではずっとラヂオ少年を続けており、一瞬頭に浮かんだ文学部への進学も、片親になった母親の「飯が食えない」の一言であきらめ、理系の大学に入った。

すると、そこには筆者より一枚上の先輩がいて、コンピュータを自作しようと^{おおほら}大法螺を吹いていた。一方、ラヂオはすでにメーカによるトランジスタ化が進み、時代はオーディオや趣味の無線、エレクトロニクスを自作する世界になっていた。

こうして大学時代は生来の路線であった文学少年とコンピュータ少年の二股をかけた。当然ながら卒業後は、当時は奇人変人しか行かないといわれたコンピュータ開発の世界に飛び込んだ。本当にコンピュータを自作する仕事に就いたのである。

● デジタル青年からマイコン中年に

デジタル技術の普及とともに、オーディオ雑誌であった「トランジスタ技術」誌も内容にエレクトロニクスを加えることになり、筆者も時折怪しげな製作記事や解説記事を書くようになった。文学指向だったおかげで、文章を書くのは苦手ではなかったため、読者を迷わすような記事を大量生産してしまった。

そうこうしているうちに、Intelから8080Aなるマイクロプロ

セッサが発売になった。実際多くの企業がこのチップを使って、ほとんどゲーム機でしかないマイコンと称する製品を出した。

しばらくコンピュータ製作やプログラミングから遠ざかっていった筆者も、一つ一万円もしたセラミック封じの8080Aを入手し、マイコン作りに励んだ。もちろん仕事にも使わせてもらった。これら汎用プロセッサ以外に組み込み用と銘打ったプロセッサもいろいろ弄った。

しかし8086時代までは良かったが、日本電気からV30版の9801シリーズが出るにおよんで、またまた自作の楽しみをメーカに奪われてしまった。

● DOS/VとOS/2で再度自作の世界へ

90年代に入るとIBMからDOS/V機とDOS4, 続いてDOS5とOS/2が発表され、基板水準ではあるが自作する楽しみが蘇った。筆者の事務所や自宅のパソコンは、それ以来すべて自作品である。もちろんWindows類だけではなく種々のUNIX系のOSも使った。お仕着せを嫌うラヂオ少年は、時々中断もしたが、半世紀にわたってその趣味を維持し続けたことになる。

しかし、秋葉原に出かけるとすぐわかるが、今や自作派は消滅寸前である。筆者も昔は自作のラヂオを売ったこともあったが、いまは人にパソコンの選定を頼まれると、自作パソコンを勧めることはしない。家電リサイクル法の世界であるから、迷惑をかけるわけにはいかないのである。

● ラヂオ少年的感覚が築いた日本の技術

さて自分の生い立ちばかり書いてきたが、日本の技術の発展に貢献した技術者には、このような自作に喜びを感じる体験が役に立ってきたと思う。しかし、自作への道の多くが閉ざされてしまっている現在、雑誌の付録や秋月電子通商でようやく自作への願望を満足させるしかない。

ところで理系ではそれほどでもないが、最近の人たちはやっと就職しても大卒後3年で約40%が辞めてしまうという。これは、政治の世界で喧しい競争原理や改革という切り捨ての論理が、彼らの深層意識に反映しているからだと思う。

この原理や論理によって、勝ち組になるために学校での知識の詰め込み競争をした結果、自分自身が感覚的にとらえているやりたいことと、現実にはできることとの間のギャップに当惑している状況である。ラヂオ少年的な実体験からの自信が不足しているのである。

子供のころから実物に触れることなく、パソコン上の架空の世界で育つと、実際に物を作るようになった際の壁は高い。しかし、自作の楽しみを得る環境が狭まっている以上、個人の趣味にだけ任せていたのでは間に合わない。日本を繁栄に導いた日本型の技術者を育て上げるにはどうするかという観点が、大学以前の教育にも不可欠になっているのではなかろうか。

(key)



ラヂオ少年